

卒業生から『文豪たちのスペイン風邪』 という本が送られてきました。

毎日 15 時半過ぎに発表される前日の道南の新型コロナ新規感染数に一喜一憂しています。中間テストも無事終了し、これから 2 年ぶりの合唱コンクール、遺愛祭に向けての準備が始まります。北海道は非常事態宣言が 6 月 20 日まで延長されていますが、函館は人口 25 万人で比較的落ち着いており、2021 年 1 月の新規感染数平均が最多の 9.1 人でしたが、4 月には 1.9 人となりました。しかし 5 月に入って増え始め 4.0 人になり、6 月 5 日に 11 人になりましたので用心が必要です。密を避けながら、規模を縮小しつつ、準備に当たりたいと思っています。

ところで、およそ 100 年前にも世界規模の感染症が流行したことがあります。いわゆる「スペイン風邪(インフルエンザ)」です。当時の内務省衛生局の記録では、1918 年 8 月～1919 年 7 月(第 1 波)には、日本で 2,116 万人が感染し、25 万 7,000 人が亡くなっていました。当時は、第 3 波(1920 年 8 月～1921 年 7 月)まで確認されていますが、全部で 2,380 万人が感染し 38 万 8,000 人が亡くなっていました。現在の新型コロナは、日本では 2020 年 1 月 15 日～2021 年 5 月 28 日で感染数 73 万 8,672 人、死者数 1 万 2,840 人です。100 年前に比べると感染規模は小さく、医療の発達、対策情報の周知で、かなり押さえられているようです。

100 年前の文豪たち(志賀直哉、菊池寛、佐々木邦、谷崎潤一郎、与謝野晶子、岸田國士、内田百閒、永井荷風)が当時の「スペイン風邪」をどう感じ、どのように対応したかが文章に残っています。それをまとめた本が『文豪たちのスペイン風邪』(皓星社)です。遺愛卒業生の金貴粉さん(国立ハンセン病資料館学芸員・津田塾大学非常勤講師)と紅野謙介さん(日本大学文理学部教授)が解説をつけて、まとめました。非常に興味深いです。

例えば、与謝野晶子は「私は家族と共に幾回も予防接種を実行し、其他常に含嗽薬を用い、また子供達の或者には学校を休ませるなど、私達の境遇で出来るだけの方法を試みて居ます。こうした上で病気に罹って死ぬならば、幾分其れまでの運命と諦めることが出来るでしょう。幸いに私の宅では、まだ今日まで一人の患者も出して居ませんが、明日にも私自身を初め誰れがどうなるかも解りません。死に対する人間の弱さが今更の如くに思われます。人間の威張り得るのは『生』の世界に於いてだけの事です。」(1920 年 1 月 23 日「死の恐怖」)と書いていました。今とは違ってインフルエンザに対する情報が限られていたので、できる対策を打ちつつも、最悪の事態を覚悟をしていたことがよくわかります。

2021 年 6 月 7 日(月)

